

# 写真投映法を用いた観察者の生活景の捉え方に関する研究

1X14D091-9 山縣 峻\*

Ryo YAMAGATA

本研究では、一般的な市街地の街路空間に対して、それを眺める観察者がどこから生活のイメージを見出すかを分析することによって、日常生活の空間において主体はどのように生活風景を認識しているのかを明らかにすることを目的とする。そのため写真投映法による観察者の注目対象及びそれへの発言から、生活のイメージに関する評価軸を分類し、実験対象地毎、あるいは観察者毎に分析することで観察者の生活景に対する捉え方の構造についての考察を行った。

**Keywords : 生活景、景観認識、写真投映法**

## 1. 研究の背景と目的

### 1.1 研究の背景

一般市街地など、人が居住する上で身近な生活空間での景観を考えるに当たり、生活景という言葉がまちづくりにおいて注目されている。しかしながら、一口に生活景といってもニュータウンでの生活景、里山での生活景、下町での生活景など、様々な生活景が存在するために生活景というものの自体が捉えにくいもののように考えられる。加えて、ある地域における人々の生活のありようは、ライフスタイルの多様化であったり、共同体意識の潜在化などの社会変化によってそのイメージが曖昧なものになっている。そこで生活とはそもそも何であるのかという、生活のイメージに対する問いかけも生活景について考えていく際に必要であると考えられる。

ここで、生活景はある地域に住む人々の生活の積み重ねによって成り立っていることと、人々の生活のイメージを観察者が認識するには生活景を眺める必要があることから、人々の生活に対するイメージと生活景の捉え方は両輪として考えていく必要があると考えられる。

そこで、まず人々の生活に対するイメージを記述するにあたり、生活の中で立ち現れる事象を、事象そのものの事実というよりもその事象を眺める人がどのように感じるのか、というところに観点を置き、生活景の観察から、観察者の生活のイメージに対する捉え方について知見を得ていく必要がある。そこで得られた人々の生活に対するイメージの知見が、生活景の捉え方の構造への理解へとつながっていくと考えられる。

このような生活景に関する研究の取り組みについては渡邊<sup>1)</sup>によるものがある。渡邊は写真投映法と呼ばれる方法によって現場実験を行い、その時に得られたインタビューデータによって観察者の撮影対象物と観察者の内面を分類することによって、観察者が生活風景を眺めるときには観察した対象物から、そこにある背景を想起する場合や、自分の環境と重ね合わせるよう

に捉えていく場合など、生活風景の捉え方にはパターンがあることを明らかにした。そこで本研究は、この渡邊の研究を踏襲し、同様の実験を行うことで熟度を深めることとする。

### 1.2 研究の目的

本研究において、観察者の日常生活の空間で主体はどのように生活風景を認識しているのか、すなわち、観察者が生活景を眺めたときに、何から生活のイメージを抱くのか、その時抱く生活のイメージの傾向を明らかにする。それによって、現在において得られた生活風景の認識の基本的構造を明らかにする。これによって生活景というものを考える際のひとつの手掛かりとなることを期待する。

## 2. 研究の概要

### 2.1 概念の整理

#### (1) 生活景

後藤<sup>2)</sup>によれば、生活景とは中村<sup>3)</sup>の「景観」の定義を借用することで「人間を取り巻く生活環境のながめ」としている。ここで用いる生活環境とは、寝食空間にとどまらない生産・生業、信仰・祭事、遊行・娯楽などのための空間も含んでいる。つまり、生活景とは生活の営みが色濃く滲みでた景観であり、特筆されるような権力者、専門家、知識人ではなく、無名の生活者、職人や工匠たちの社会的な営為によって醸成された自生的な生活環境のながめである。また、以下に示すダイアグラムのように、生活景とは自然景の対比として扱われており、自然景が山や森林といった自然環境を対象としているのに対し、生活景とは日常的な生活空間を対象としている。



図 2.1 後藤による生活景に関するダイアグラム<sup>2)</sup>より引用

また、本研究においては生活景を考える際に生活感という言葉を用いる。大辞泉によれば、生活感とは「喜怒哀楽の感情を持ち、学び、働くなどの活動を行う、人らしい雰囲気。また、住まいについて、いかにも人が暮らすところという感じ。」と定義されている。

## (2) 写真投映法

精神科医の野田<sup>3)</sup>によって考案された実験手法であり、被験者にカメラを持たせ、一定の指示範囲内で自由に撮影してもらい、撮影された写真から被験者の内面と外界との関係を読み取ろうとする調査方法である。野田の行った実験においては、子どもたちにカメラを持たせ、ある一日の生活を撮影してもらい、撮影した写真について何を撮ったか、なぜ撮ったかなどを話してもらうことで子どもの内面、そして子どもを取り巻く社会との関係を考察している。

## 2.2 既存研究の整理

生活景に関する既存研究として以下のものがある。

身近な生活環境を眺める観察者の捉え方に着目したものとして先述の渡邊の研究がある。これについては後述する。

また、松田<sup>4)</sup>は、千葉県浦安市海楽地区を対象地として、生活景に対して、来街者と居住者という異なる属性の主体がどのように景観へのイメージを生成するのかを写真投映法によって調査し、生活景のイメージ構造を明らかにした。

加えて、居住者の日常風景に対する嗜好性に着目したものとして秋浦<sup>5)</sup>らの研究がある。大阪市住吉大社周辺地区を対象とし、地区の歴史性を旧街道の存在や社寺、町屋や長屋といった要素をマッピングすることで見出し、ヒアリングによって居住者の日常風景の構造を調査することで地区の歴史的蓄積と居住者の日常風景への嗜好性との関係を明らかにした。

## 2.3 先行研究の概要

本研究がその方法などを踏襲する渡邊の研究について以下に示す。まず、渡邊は日常的な生活の風景について考えていくにあたって、生活の風景から醸し出される生活感について、観察者がどのように認識するのかを明らかにする必要があるとした。しかしながら、そのような風景は長い時間の蓄積によって無意識のうちに成り立ったものであり、その場所で暮らす住民が意識的に自分たちの生活の風景を評価するのは難しい。

そこで、来街者、すなわち生活の場を外から眺める観察者が抱くイメージを読み解くこととし、主体の生活の風景の捉え方を、生活感として捉えられた対象と、その対象を生活感として捉えたときの観察者の心情や思考といった2つの面から明らかにしようとした。

そのために、写真撮影を用いた現場実験とインタビュー調査によって、主体がどのようなところから生活感を感じるのかを把握する。加えて、被験者へのアンケートから被験者の生活史を把握し、主体の内面の考察に用いられた。

結果として、生活の風景の捉え方について捉える対象と内面の2つの側面で見ると3つのパターンが存在し、1つ目は対象の背景にある意味を捉えるパターン2つ目は対象に自己の内面を投影するパターン、そして3つ目に対象をコレクションのように拾い上げるパターンがあることを明らかにし。また、生活の風景の価値を考える上で、主体が共感できること、自身の内面を投影できることが着眼点になることを示した。

## 2.4 本研究の位置づけ

本研究は渡邊<sup>1)</sup>の研究を継続するかたちで行われるものである。渡邊の研究における現場実験およびインタビュー調査が行われたのが2012年であり、5年経過した現在2017年においてはまちの様子も変わり、社会情勢も変化などによって人の内面なども変わっている可能性が考えられる。そこで、渡邊の研究と同じ実験対象地、時間帯や手順によって実験を行うことで渡邊の研究の成果を検証すること、および現場条件の変化や被験者の相違による影響を明らかにし、既存研究を発展させる。そこから、日常的な生活の場における景観認識に関する知見を深めることを期待する。

## 2.5 研究の流れ

以下に研究の流れを示す。

### ① 現場実験

渡邊の研究と同様の方法で、複数の実験対象地で写真撮影を用いた現場実験と実験後のインタビューを行う。生活感を感じるものについて被験者に撮影を行ってもらい、ここ

から生活の風景として捉えられたものを抽出する。

- ② テキスト分析  
インタビューによって得られた発言をその意味から分析し、生活の風景の捉え方を把握する。
- ③ 実験対象地の分析  
2) で得られた分析結果のうち、実験対象地毎に撮影された対象などを分析し、実験対象地の特徴について考察する。
- ④ 観察者の生活風景の捉え方の分析  
2) で得られた分析結果のうち、被験者の撮影した対象や、被験者が生活感を感じる対象を観察したときの心情や思考などといった内面について分析を行い、個人について生活の風景をどのような内面を以て捉える傾向にあるのかを明らかにする。
- ⑤ 既存研究との比較  
2) から 4) について渡邊の研究と比較し、主体の生活の風景の捉え方について違いがあるかどうかの分析をおこなう。違いがあった場合、その要因についても考察を行う。



図2.1 実験のフローチャート

### 3. 実験方法

#### 3.1 実験方法の概要

先述したとおり、実験対象地、時間帯、実験手順などといった実験条件については以下の渡邊の研究と同じ実験条件で行う。

まず、対象地については、被験者が生活感に関して多様な発言をすることを期待し、様々な種類の住宅が観察され、かつ雰囲気の異なる4カ所の地区が選定されている。

- ① 新宿区富久町  
新宿駅から離れたところかつ東新宿駅の近くである。新宿区のほぼ中央に位置し、起伏はほとんどない一方で、幅員の小さな街路が多く見受けられる。商店街があり個人経営の店が多いが、昼であっても閉まっている商店も存在した。
- ② 新宿区坂町  
四ツ谷駅の近くにあり、急な坂や階段が見受けられるほか、幅員については坂町と同様に狭い。坂沿いを含めて数多くの住宅が存在する。

- ③ 練馬区旭町  
光が丘駅から少し離れたところに位置している。街路は新宿区と比べて広く、比較的新しい住宅やいくつかの個人商店があるほか、市民緑地が見受けられる。
- ④ 練馬区谷原三丁目  
光が丘駅から少し離れたところに位置している。旭町と同様に街路は新宿区と比べて広い。公営団地や古い住宅が並ぶほか、公園が設置されている。

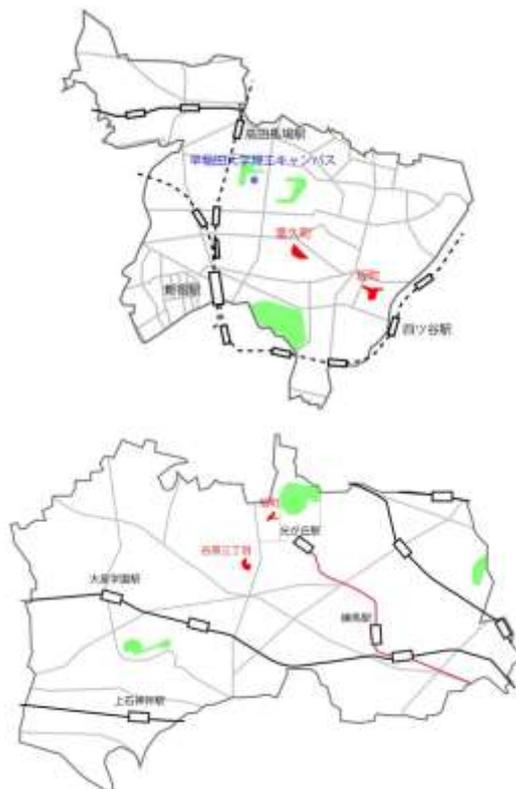


図3.1 対象地位置 (Google mapより作成)



図3.2 実験対象地の航空写真と実験経路 (Google mapより作成)

被験者の人数、および属性、実験手順については以下の表に示す。加えて、実験時に用いた白地図については下図に示す。

表3.1被験者属性、および人数

属性	人数
景観デザイン研究室所属の学生	男性4名 女性2名
景観デザイン研究室以外の社会環境工学科の学生	男性2名
社会環境工学科以外の学生	男性4名 女子3名

表3.2被験者の配布資料に提示した実験指示内容

指示	内容
	①地図で示された街路を歩いてもらいます。多少街路から外れた道に入っても、街路を戻しても構いませんが、指定された経路は全て通るようにしてください。
	②経路を歩く際、被験者が歩いた経路を詳細に記録するため、筆者がビデオを撮影しながら追尾調査を行います。
	③経路を歩く際に、生活感を感じたら、どこ(なに)から感じたのか、要因となっているかを簡単に地図に書き込み、その様子がわかるように写真を撮ってください。
	④写真に写らないような音、におい、雰囲気などの要因も感じられれば地図に記入してください。
	⑤新鮮な気持ちでできるだけたくさんの発見をしてください。
	⑥実験に時間制限は設けませんが、30分を目安に歩いてください。
	⑦実験終了後にカフェなどに移動し、簡単なインタビュー調査を行います。実験中に撮影した写真や記入した地図を見ながら、写真や記入からだけでは読み取れない部分の補足説明をしてもらいます。



図3.3現場実験時に用いる実験対象地の地図

## 4. 実験結果

### 4.1 写真投映法実験

実験結果を以下の表に示す。ただし、試し撮り、生活感を感じない、あるいは生活感と無関係であったり、なぜ撮ったか分からないとインタビューで回答された写真などについては無効としている。撮影写真の累計枚数は2225枚、有効写真の累計枚数は2203枚であった。

表4.1対象地ごとの撮影結果

対象地	写真枚数	有効枚数
富久町	681	675
坂町	686	581
旭町	517	509
谷原三丁目	441	438

### 4.2 テキスト分析

写真投映法実験の中で行われたインタビューの音声データをテキストデータへと変換する。テキストから、生活感を感じた対象物の属性、および、その対象物を撮影した際の内面の様子に着目し分類を行う。



図4.1テキスト分析の過程の一例

また、以下にテキスト分析において撮影対象物と観察者の内面をそれぞれ分類した際の内面分類表を提示する。この分類は渡邊の研究と同様のものである。ここでいう撮影対象物とは、被験者が生活感を感じるものを撮影したときに、まず外界を視覚や嗅覚などで認知する際の状況であり、内面というのは外界を認知した後に被験者が抱く何らかの思考や感情のことを指している。

表4.2テキスト分析における分類

対象の分類		内面の分類	
ID	項目	ID	項目
1-1	属性	1	知識、一般的視点
1-2	属性	2	想像
1-3	ディテール	3	経路
1-4	印象	4	印象、評価
2	音、匂い	5	新鮮さ、移しさ
3	内部情報	6	意志
4	物語	7-1	間接的な体験
5-1	属性	7-2	馴染み
5-2	属性	7-3	直接的な体験
5-3	ディテール	8	過去の記憶
5-4	置かれ方、置かれる環境		
6-1	属性		
6-2	属性		
6-3	ディテール、部分		
6-4	用途		
7	空間構成		
8	記憶		
9	時刻、季節		
10-1	空間性、シーン全体		
10-2	場所の全体像		
11-1	シーケンス		
11-2	場面の対比		
11-3	アクセント		

## 5. 観察者の捉えかたについての分析

実験の結果から考察を行う。

### 5.1 対象地ごとの分析

テキスト分析の捉え方の分類から対象ごとに比較すると以下の図5.1、図5.2に示すような結果になった。

図5. 1は4対象地における注目対象に関する発言の割合を示しており、全対象地において表出要素に着目した発言が多く見られるものの、とりわけ坂町と谷原三丁目要素に関する発言の割合が大きい。これは坂町では植栽について、谷原三丁目では自転車や洗濯物などに対する指摘が多かったためと考えられる。

また、富久町においては建物に関する発言が比較的多く見られる。これはコインランドリーや寝具店、パン屋などといった実験時に営業中の商店などに多く注目が集まった結果だと考えられる。

さらに、坂町と旭町については空間構成に関する発言が比較的多い。これは、坂町については坂や階段、袋小路などといった街路構造への注目が多かったためと考えられ、旭町については生産緑地に注目した発言が多かったためと考えられる。

図6. 2は4対象地における注目対象および内面に関する発言の割合を示しているが、坂町と谷原三丁目は他の2カ所と比べて内面に関する発言割合が大きい。これは、植栽や洗濯物といった表出要素から背景を想像するような発言が得られたためと考えられる。

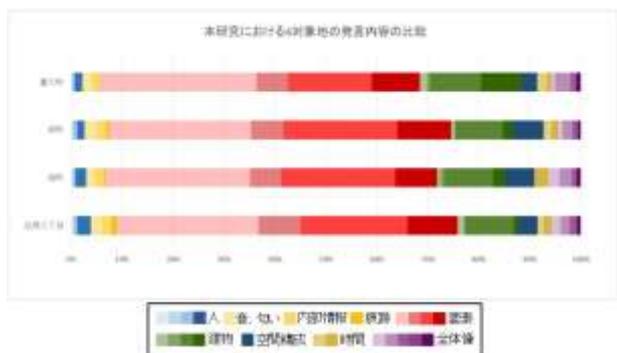


図5. 1対象地ごとの注目対象に関する発言の割合

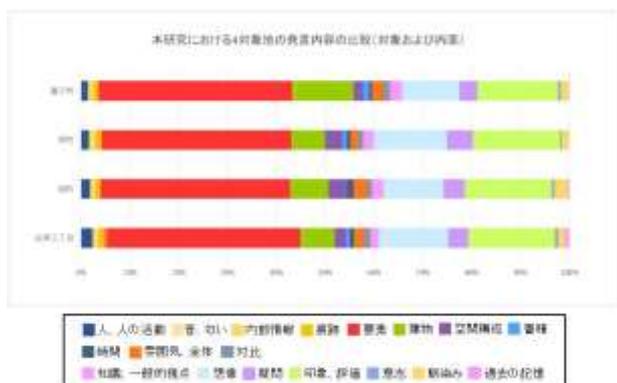


図5. 2対象地ごとの対象および内面に関する発言内容の割合

## 5.2被験者ごとの分析

発言内容から被験者の生活景の捉え方について対象と内面の2つから分析を行う。

### ①捉える対象について

被験者15名の対象に関する発言についてクラスター分析を行うと以下の図5. 3に示されるようなクラスターが得られた。

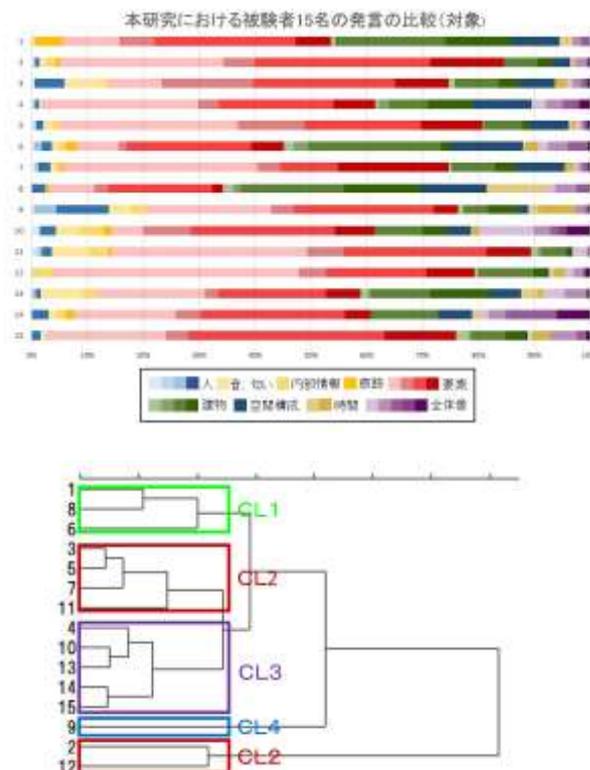


図5. 3 被験者ごとの発言割合とクラスター分類(対象)

CL1) 建物に関する発言割合が大きい

CL1に属する被験者は建物やそのディテールに関する発言の割合が多く見られた。

CL2, CL5) 要素に関する発言割合が大きい

CL2、CL5に属する被験者は自転車や洗濯物といった表出要素に着目した発言が多く見られた。その中でも要素のディテールや置かれ方などといった住民の工夫についての指摘が多く見られた。

CL3) まちの全体像に関する発言割合が大きい

CL3に属する被験者は「地元の人が買ってくるようなお店が多かった気がするなあ」といったような風景を連続的な体験として指摘している発言の割合が大きく表れた。

CL4) 人に関する発言割合が大きい

CL4に属する被験者は人の活動を直接目にしての指摘や、匂いや音など住民の活動を間接的に察知しての指摘が多く見られた。

②内面について

被験者15名の対象に関する発言についてクラスター分析を行うと以下の図6. 4に示されるようなクラスターが得られた。

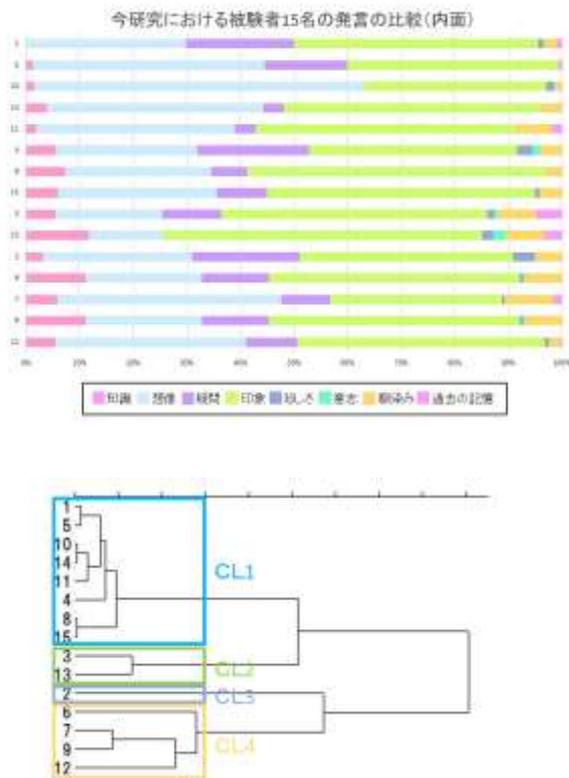


図5. 4 被験者ごとの発言割合とクラスター分類(内面)

CL1) 想像、印象に関する発言割合が大きい

CL 1 に属する被験者は目の前の現象に対して印象や感想を述べるといったような発言と、その現象の背景を想像しようとする発言が多くなされた。

CL2) 印象、馴染み、過去の記憶に関する発言割合が大きい

CL2 に属する被験者は他の被験者と比べて目の前の現象そのものへの印象や感想といった発言のほか、自身の生活と重ね合わせて過去を振り返ったり現在の自身の生活となじみが深いことへの発言が多く見受けられた。

CL3) 珍しさに関する発言割合が大きい

CL3 に属する被験者は他の被験者と比べて目の前の現象に対して自身の生活と比較し、馴染みではなく珍しさを感じた発言が多く見られた。

CL4) 一般的視点、馴染みに関する発言の割合が大きい

CL4 に属する被験者は他の被験者と比べて目の前の現象に対して現在の自分の生活となじみが深いことへの発言と、自身の常識や知識に基づいた発言が多く見受けられた。

6. 結論

6.1 まとめ

本研究で得られた成果について以下に示す。

- 対象地ごとの発言の比較から、観察者は植栽やコインランドリーなど、背景となる住民の存在がうかがいやすい要素や建物から生活感を捉えやすい一方で、坂や階段など、その場所の地理的特徴から生活感を感じる可能性があることが示唆された。
- 被験者ごとの対象に関する発言の比較から、生活感として捉える対象については要素、建物、人に着目した観察のタイプの存在の可能性、一方で、ある特定のものだけに着目するのではなく、連続的な体験として全体的に風景を観察するタイプの存在の可能性が示唆された。
- 被験者ごとの内面に関する発言の比較から、観察者の内面は大別して「対象の背景に暮らす人のことを思い描くこと」「注目対象に対する自身の意見や一方的な評価を述べること」「自身の内面に起因する発言をすること」といった先行研究で得られた3つの観点が観察者の内面において基本的な要素となる可能性が示唆された。

6.2 今後の課題

本研究では身近な生活空間としての住宅地を実験対象地としたが、下町などのさらに異なる生活感を内包していると考えられるまちについても同様の実験の行う必要がある。また、被験者の属性が学生で統一されているため、異なる職業や年代の被験者について実験した場合異なる結果が得られる可能性がある。

<参考文献>

- 渡邊優, 観察者の捉え方の多様性に着目した生活の風景に関する研究, 早稲田大学2012年度修士論文, 2013
- 社団法人日本建築学会: 生活景 身近な景観価値の発見とまちづくり, pp. 25, 学芸出版社, 2009
- 野田正彰: 漂白される子供たち\*その目に映った都市へ, pp. 10, 情報センター出版局, 1988
- 松田恵理子: 住民・来街者の風景の捉え方とイメージ生成に関する研究—千葉県浦安市を対象として—, 早稲田大学2014年度修士論文, 2015
- 杵浦理子, 山本聡, 下村泰彦, 増田昇, 居住者の日常風景に対する地区の歴史的蓄積との関わりについて, ランドスケープ研究: 日本造園学会誌: journal of the Japanese Institute of Landscape Architecture 62(5), pp677-680, 1999